

2. コミュニティを基盤とした犯罪防止活動

コミュニティを基盤にした犯罪防止活動には4つの主なタイプがある。

- 1) コミュニティの動員
- 2) 暴力グループに関するコミュニティでの防止策
- 3) コミュニティを基盤とした良き指導者制（メンター制）
- 4) コミュニティを基盤にしたリクリエーション

以下ではこのそれぞれについて概要を延べ、事例について説明する。

（1）コミュニティの動員

コミュニティでの動員に関する活動プログラムの目的は、地域社会の問題を解決するための諸個人の協力活動を助けるものである。例えば、「近隣監視活動」（Neighborhood Watch）の場合、地域の警察は、不審人物を観察するように住民に要求している。

ただし残念なことに政策評価調査によると、これらの活動のほとんどは、単独では、地域の犯罪率を下げるという点には影響を与えていないことがわかる。

一般にこれらの活動には十分な人数が参加しておらず、効果をあげていないのである。加えて、いくつかの活動では、実際の犯罪の減少がないのみならず、犯罪への恐怖を増加させる傾向がある。例えば、「近隣監視活動」では、犯罪を効果的に防止することがないまま、犯罪への恐怖を増加させている。

犯罪率が最も高い地域に住む人々は、多くの場合自分の近隣の人々に恐怖心を抱いているため、一緒に活動することを嫌がっていることから、「近隣監視活動」のプログラムがうまく機能していないといえる。

・コミュニティの動員についての「近隣監視活動」（Neighborhood Watch）の事例

「近隣監視活動」（Neighborhood Watch）の目標は、近所の人同志が近所にいる犯罪者を注意して監視し、不審人物を見た場合、警察に通報するというものである。

アメリカでは、多くの住民が隣近所に住んでいる人を知らないという事実がこの取組の背景にある。ボストンにおける取組は、1985年にボストン警察署で始められた。

ボストン警察は、住民が近所の家をお互いに監視することができるようにストリ

ート(通り)を基盤として3400の隣組(Neighborhood)に町を分割し、警備体制の必要があるかどうかを調査している。もし、住民が警備体制の強化を必要と感じている場合は、警察が近隣警備監視体制活動を始動させる。それぞれの活動は、特定のコミュニティに適合するように作られている。約1000のボストン隣組(Neighborhood)とおおよそ8万人の住人が「犯罪監視活動」に関わっている。

警察は、活動を始めるにあたってコミュニティの住民を必要とする。通常は、付近の犯罪を警察に電話で通報した人から始まる。警察はこの人に、コミュニティ監視活動のための主導的な連絡係になるよう依頼する。断われた場合、警察は活動に参加できるそのコミュニティの別の人を紹介してもらうよう住人に依頼する。その後、警察は、ボランティアの小さなグループが出来るまでコミュニティの住人と連絡を続ける。

また警察署はコミュニティに出向き、ボランティアの人々に簡単な「トレーニング講習」を実施し、安全についての問題やそのコミュニティでの犯罪をどの様に監視することができるかといった方法について話し合うのである。

正式なシステムのために割く時間的余裕がある人はほとんどいない。そこで多くの場合は、顔合わせをして電話番号を交換し、非公式の電話連絡網を作る。警察は、住人が近隣犯罪監視活動のメンバーであることを示すための玄関用のステッカーを配布している。また、ステッカーはコミュニティが犯罪監視活動を実施していることを表すという効果をもつ。大きな広告板など戸外に掲げる宣伝法もある。

活動の参加者は、より強力な助力を必要とする際には警察に電話できる。またもしそのコミュニティの犯罪が統計的に増加した場合は、警察はさらに組織的な努力を行い、解決にあたるようになっている。

<「近隣監視活動」の成果>

犯罪監視活動によっても、犯罪はなかなか減少しない。ボストン警察は、近隣住民が互いに知り合い、電話番号を交換するようになれば、監視活動がより効果を上げるのではないかと予測している。

この例では、市民が組織的によくまとまっている1000以上のストリート(通り)がある。警察は、高犯罪率の地域での犯罪監視活動を始めるにあたり、まだ問題はあつものの、全体的には活動は成功しているとみなしている。

・「犯罪撲滅活動」(Crime Stoppers)の事例

「犯罪撲滅活動」(Crime Stoppers)は、犯罪解決や防止にむけて警察に役に立つ

情報を知らせるための電話番号を住民に配布する。そしてもし住民からの情報が犯罪解決や防止に役立つものであれば電話した者には報奨金が与えられる。

「犯罪撲滅活動」は、世界中の900の都市で実施されている国際的な活動でありアメリカでは20年前から開始されており、ボストンでの開始は5年前である。

ボストンにおける「犯罪撲滅活動」にはボストン警察基金が支給されており、「犯罪撲滅活動」ボストン支部は、アメリカ全土からの情報（チップと呼ばれるもの）を受けて、もっぱらボストンの地域住民に報いている。

各州の地方紙とテレビニュースのニュース局は、毎週、現在取調中の1つの犯罪にスポットを当てる。事件に関する事実がはっきりと報道され、容疑者の写真やスケッチが公開される。犯罪の犠牲者（被害者）がその事件を解決するための支援を視聴者に求める様子が放送されることもある。

「犯罪撲滅活動」の電話番号（フリーダイヤル）は、事件に関わるどんな情報でも視聴者が報告できるように備えられている。電話した者は、ある番号を教えられ、そこに後から電話して報奨金を受け取る。この活動では、かかってきた電話の記録や追跡は行わないし、電話してきた者の身元が記録されることはない。

電話してきた者は、最高で1000ドルまでの礼金を受ける。チップラインの情報は月曜日から金曜日までの午前8:30から午後11:30まで受け付けている。

メディア（テレビや新聞）での公表と簡単な電話連絡の方法によって、この活動はコストがあまりかからないにもかかわらず、成果のあるものだという評価をうけている。

（2）ギャング（非行少年グループ）による暴行の防止策

ギャングを防止するための活動としては、1）人びとがギャングのメンバーになることを防止する活動、2）ギャング・グループに直接介入する活動、という2つのタイプのものがある。

若者は、安定した家庭生活がなかったり、若者同志の友達関係がないといった要因でギャング・グループに入る。そのため、若者がギャングのメンバーになるのを防止するための大半の活動は、放課後に若者が集まる場所や活動を提供することに焦点を当てている。ボーイズ・アンド・ガールズ・クラブとYMCA/YWCAは、このような種類の活動の例であり、長い歴史があるだけでなく、参加率もよい。

しかし、これらについての政策評価をみる限り、こうした活動でギャングによる暴行を

直接減少させているという成果はあがっていない。

多種多様なギャングへの介入活動がある。だが、ほとんどの活動は効果的であるとはいえない。実際のところ活動の行われている所で、ギャングの暴行の増加がみられるといった逆の政策評価がなされているものもある。

こうしたなかで、もっとも期待がもてそうなものは、ギャングの団結力の減退を試みている活動である。例えば「分断するためのワーカー活動」(Detached Worker program)は、ギャングのメンバーとソーシャル・ワーカーを一組のペアにするというものである。

ソーシャル・ワーカーは、ギャングのメンバーと友人関係を築き、一日中行動を共にする。ソーシャル・ワーカーの多くは、ギャングのメンバーが親しみをもちやすいような、少し年上の男性であるだけでなく、多くは、彼自身以前ギャングのメンバーだったという経験の持ち主である。

ソーシャル・ワーカーがギャングに危険なことをしないよう説得出来るため、ソーシャル・ワーカーがギャングと共に行動している間は、暴行を減少させることに成功している。ただし、一度ソーシャル・ワーカーが離れてしまうとギャングの暴行はまた元のレベルへと戻ってしまうという欠点がある。

(3)「良き指導者(メンター)活動」(Mentoring Programs)

コミュニティをベースにしたこの活動は、犯罪防止にとって最も効果的な取り組みというべきものであろう。

メンターとは、信頼できる手本や指導者のような人物のことである。貧困なコミュニティにおける1つの問題は、子どもが信頼できる大人との強い結びつきをもてない点である。このプログラムでは、正しく行動することを子どもに教える手助けをするメンターを、子どもたちにつけてやることを目的とする。メンター・プログラムは、友人、安定した人間関係、先生、指導者といった要素をすべて兼ね備えた1人の人を子どもに提供するのである。メンターとなる人物は、単に子どもの問題に焦点を絞るだけでなく、年上の友人のように親しく接していく。

メンター活動の政策評価を見ると、メンターが1年間もしくは、それ以上の期間を通して一人の子どもと関わった場合にのみ、よい効果が表れているようだ。これらのプログラムを受ける子どもは、両親が離婚していたり、家族の引越しが多いなど、その多くが不安定な人間関係を経験してきている。そのため、こうした子どもは、安定した継続的な人間関係を築くことが困難であり、失望することを恐れて、友達を作ることを避けようとして

いる。メンター・プログラムは、メンターが、子どもと強い結びつきを築き上げたとき、最も効果がある。その後、その子どもは、メンターから認めてもらえるよう正しく行動するようになる。

評価のための調査によると、長期に渡ってメンターとの関係を保持した若者の場合、ドラッグを始める者はそうでない者より46%少なくなり、飲酒を始める者も27%以下に減るという結果がでている。またメンターを持つ子どもは、以前より定期的に学校に通うようになる。

各種のメンター・プログラムの中でも、「ビック・ブラザーズ／ビック・シスターズ活動」(Big Brothers/ Big Sisters) は、よく知られており、また効果のあがっているコミュニティ活動である。

(4) コミュニティ基盤のリクリエーション

前に述べた通り、コミュニティ基盤のリクリエーション活動は、ギャングの暴行を防止することにおいては、特に効果をあげていない。しかし、その活動は、破壊行動、未成年の飲酒、もしくはドラッグの使用といった小さな犯罪を減少させることにおいては、成果をあげているようである。

子どもは、退屈で何もすることがないと、破壊行動のような小さな犯罪を起こしてしまうと、多くの人々は考えている。ある調査では、ボーイズ・アンド・ガールズ・クラブに定期的に通う子どもは、ドラッグを使用したり、学校をさぼったり、公共物を破壊することが少ないという結果を得ている。また、補導される者も少数であった。

ある行政機関の報告によると、ミッドナイトバスケット(深夜のバスケットボール)のようなコミュニティ基盤のリクリエーション活動が、ドラッグ使用や破壊行動を減少させている。残念ながらこうした取組は、より裕福で、犯罪率が低い地域でしか行うことができない。相当程度低い犯罪率を保持しているコミュニティだからこそ、そうした効果が上げられるのであって、活動の効果はそのコミュニティの安定度の関数であるといえる。

3. 家族を基盤にした犯罪防止活動

1970年代、および1980年代の多くの研究は、幼いとき両親にひどく扱われたり虐待された子どもは、成長後に犯罪を犯しやすいことを明らかにしている。現在、家族を基盤とした犯罪防止活動には、2つの主なタイプがある。子どもを育てるための親のスキルの改善を目的とするものと、虐待の防止を目的にしたものである。

(1) 子どもを育てる親のスキルの改善

政府は、子どもを育てる親のスキルを改善する活動が、犯罪を減少させるうえでかなり役立っていると評価している。

小さな子どもを持つ貧しい女性は、非常に孤立していることが多い。このような女性達には、子どもを育てるスキルと、感情面のサポートの両方が欠けている。そのため、彼女達は、子どもの世話をあまりせず、自分の機嫌の悪いときには子どもを虐待することもある。最も効果的な活動は、保育園のような子どものための活動と結びついた、ソーシャル・ワーカーないしは看護婦による家庭訪問である。

問題を抱えている妊娠中の女性達は、通常、社会奉仕機関や学校や病院等により確認され、出産後の家庭訪問の日程が組まれる。家庭訪問では、看護婦、ソーシャル・ワーカーや教師達が、新しく母親になった者と、その子どもを訪問する。家庭訪問は出産後すぐに開始され、少なくとも2年間は続けられる。

専門家に訪問してもらい、自分の問題を聞いてもらうことで、母親たちは精神的なサポートと子どもの育て方についての情報を得る。特に、新生児からの精神的ストレスをどのように処理すればよいかについて指導を受ける。

政府による活動評価では、家庭訪問活動に参加した母親達は、自分の子どもと情緒的結び付きがかなり強くなることが評価されている。この活動によって子どもが虐待を受けたり放置されることが少なくなり、子どもたちの反社会的な行動も減少した。また、子どもは比較的高い認知能力を身に付けることができ、その成長後も逮捕率が低かったのである。

親としてのスキルを開発するための活動は、子どもが2歳になるまでの早い時期の間に実施されるのが、もっとも効果的である。

（２）虐待防止

女性がパートナーから受ける暴力（一般的にドメスティック・バイオレンス、もしくは家庭内の虐待と呼ばれるもの）を防止する、種々異なるタイプの活動がある。ほとんどの活動は、繰り返される犯罪を、防止することに焦点を定めている。

「ドメスティック・バイオレンス巡回」活動（The Domestic Violence Visitation program）は、ドメスティック・バイオレンスのおきたことがある家庭に警察官が再訪問する活動である。まずはじめに警察官は、ドメスティック・バイオレンスが発生しているとの通報に応じてその家庭に呼ばれる。ただし多くの場合、ずっと殴られてきたり、殴られる恐れを抱えてきた女性は、正式な告訴の申し立てをしないことが多く、従って彼女のパートナーが逮捕されることもない。こうしたケースでは、警察ができることはほとんど無に等しい。

しかしながら、「ドメスティック・バイオレンス巡回」活動（The Domestic Violence Visitation program）では、その後の状況をチェックするために、その世帯を数日後に訪問し、パートナーに対し再度その女性に傷害を与えないよう警告する。

活動評価の検討によると、加害者の暴行の繰り返しを止める上でこの活動は効果をもっていない。ただし、警察の訪問を受けた女性達は、再度殴られた場合に訪問以前よりも、ずっと多く警察に通報するようになっている。

他に「虐待された女性のための緊急避難所」（Battered Women's Shelters）に資金を提供する諸活動がある。アメリカには、虐待された女性のためのシェルターが、約１２００ある。パートナーから暴行虐待を受けた女性がいつでも逃げて行ける安全な場所を提供するというのが目的である。

しかし、シェルター活動は、一時的な安全を女性に提供する上では非常に効果があるが、長期的にみると必ずしも効果があるとはいえない。暴力をふるうパートナーから避難所に逃れ、しかし虐待する相手に対してそれを止めさせるための具体的な次のステップを何もとらない女性達は、帰宅した後にはまた殴られてしまいやすい。

一方、シェルターにきた女性で、裁判所の保護命令（protection order）の手続き（加害者が近くによってきたり、バタードウーマンにコンタクトをとることを禁ずる）をとったり、セラピーや虐待防止活動に参加するといった他の手段をとった女性は、再度暴力を受けることが以前より減るようである。

以上のことから、ある活動が単独で取り組むよりも、コミュニティを巻き込んだり、法執行や社会福祉活動など多面的な活動を組み合わせていく方がより効果をあげるものであることが一層あきらかになる。